

にじさんじ短編まとめ

まむれ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なお二つ目以降を書くとは言っていない

一話目 夕陽リリを救うお話

pixivにも同様のものを掲載しております

目次

過去⇄未来	1
あるいは有り得たかもしれない世界線 (ギルザレン様ともいもい)	13
闇色と金色と	20
失言の被食者	28
育ち盛りの三人	36
Stoop to conquer	46
Weather is unknown	57
自己と自己	63

過去⇄未来

夕陽リリは未来人である。

未来から過去へ、悪戯好きな彼女はその趣味の範囲で過去の電波を勝手に乗っ取り、面白そうだから配信をやってみようかなと思おうくらいはアクティブな人間だ。

「行きます逃げます、未来人ですから」

沢山のいかないでコメント、それを無視しえ配信終了のボタンを押す。

楽しかった。追いきれない程流れるコメント、剣持先輩への歪んだ愛の告白。自分が楽しませる側であるべきなのに、終始笑ってばかりで。

それでも面白い楽しいと言ってくれるのが何より嬉しくて、悲しい。

配信に使っていたスマホに指を滑らせる。少ない連絡先の中の一つを選んで呼び出し音を鳴らす。

通話をかける先は——剣持刀也。これから全てを白状するからか、鼓動が普段より五月蠅く自己主張をしていた。

夕陽リリは未来人である。

ただし、過去に干渉したのは悪戯の一環などではない。

見渡せば無機質な四角い部屋。あるものはパソコンと机にベッドと二つのドア。それが夕陽リリの世界の全てだった。

今が何年なのかわからない。少なくとも、夕陽リリが生まれた時から世界は崩壊していた。

世界のあちこちが虚無の空間に蝕まれ、ただ虚空使いが全ての原因とだけ書物に伝わっていて、それ以外の歴史がなくなった世界。

「過去を変えれば未来も変わるはず……君に世界を救ってほしい」

ただそれだけを言われた。そうして過去に干渉するようになってわかった

どれだけ過去を変えても変わらない。やり遂げたと思つて元の時代に戻つてきても、そこで待ち受けるのは変わらぬ白の部屋。

いや、或いは変わったのかもしれない、ただしその時点でその世界は独立して、私のいる時代に繋がらなくなっているはず。

それでも、止まらなかつた。私の世界はそのままでも、改変する事で跳んだ先の世界が救われるかもしれないから。

少なくともその瞬間だけは救えたり救えなかったり、いつしか何回目と数えることを止めてから気付く。

成長が、止まっている。色々な欲求はあれど、身体がまったく劣化する気配がしない。「成長すら虚空に吞まれちゃったかー、あはは」

誰も聞く相手などいないのに。

誰も成長を見届ける相手などいないのに。

ただ、いよいよ自分が人間でなくなってしまうことがひたすらに悲しかった。

「次で最後にしよう、うん！」

皮肉な話だ。疲れて疲れて疲れきって、跳んだ先に全ての元凶がいたなんて。

「ああ、リリちゃん面白い話するんだね」

「いやあこれがほんとの話なんです！ 信じられないかもしれないけど、あははは！」

案の定、通話の先にいる剣持先輩は信じる気配がなく、ちよつと意外そうな声色を出すのだった。

「いや信じられないかもしれないけどこれ、本当の話なんだよ？」

「それが本当だとして、どうやってにじさんじに紛れ込んだのって話になるじゃん」

「そんなもの、未来の力でちよちよいのちよいですよ」

「便利ですねぇ」

呆れられてもこればかりは説明したところでわからないし、そもそも説明していたら本題に入れない。

決意はした。それが鈍る前にはつきりと伝えてさよならをしくちや。

「で、それを話した本題なんだけどね」

「いや続くんですかそれ」

「まーまーそれでね、大きく干渉しなければいずれは私の時代になるんだけど」

「はいはいそれで」

「多分、剣持先輩からなんですよね。色々調べたんですけど虚空で事象が途切れて時間が消失するって能力」

「いや単なるネタじゃないですか、人を勝手に能力者にしないでください」

そう、最初は単なるネタだった。けれども、そのネタを幾万人がずっと続けられれば常識になり、世界に影響を及ぼす。多分。

何せ原理がサツパリわからない。そもそも過去のことは跳ばないと調べられず、資料も持ち帰れないとなれば研究のしようもない。

「まーだから私、剣持先輩をちよつと闇に葬ろうかと思ひまして」

「……」

『コメントしたものをから殺していく』だなんて、まさか私の動きを読んでるかと思つて吃驚したよね〜」

ぎゅつと薄型携帯を持つ手に力が入る。

落ち着け私、

「最初はそのつもりでねー。絶望の中に光を見出したかと思うくらいだったよ？ 最後の最後で大元を消せるなんて、考えてもなかったし」

「の割には今日まで僕生きてますけど」

「……まーちよつと皆さんに絆されたというか、久しぶりにこんな楽しい時間を過ごして」

どうせ最後だと伸び伸びしていたら絆されるくらいには楽しさを感じて、同時に惜しくなつてしまつた。

この三日間悩みに悩んで、じゃあ最後に配信だけして終わろうと考えて、その配信を終えたのが今。

気付いたのだ。ここでぬるま湯に浸つていてもいずれ別れは来る。光を見出したとしても、絶望に囲まれていることに変わりはない。

だから、スッパリとここで断ち切る。

「断ち切る、つもりだったんだけどなあ……」

「出来なくなっちゃったと」

「うるさいなあ、でもしよすがないじゃん。皆良い人なんだもん」

信じてくれるかどうかは別として、そのまま話を続けさせてくれるようだ。

やたらと喉が乾いて水を飲むのは、きつと緊張をしているから。

「だから悩んで、今日でおしまいにする。配信もやったしね」

「それで、いいんですかりりちゃんは」

「いいの、これが正解なのさ」

「僕達にとつては正解じゃないですよ、こんなの。次回を楽しみにしてくれる人だつて
沢山いるのに」

「楽しかったよ剣持刀也君、皆にもそう言つていてね」

「ちよつと人の話を」

何も言わせない。切断ボタンを押したあと、スマホの電源を切ればもう向こうどうしようもない。

終わってみれば呆気なかった。いや、呆気なくしたと言うべきか。

あのままだったらと耳を傾けていたら、今度こそ覚悟が無駄になりそうな気がして。

部屋にあるパソコンも二度と起動することはないだろう。このまま何をすることもなく、ただ無駄な時間を過ごしていくことになる。

最初は辛いかもしれない。あの賑やかな日々^に想いを馳せて、記憶に泣かされる日々が続く。でもいつか大丈夫になるから。

「今日くらいは、泣いて良い、よ、ね」

もちろん離れたくない。ずっとずっと一緒に話して、配信もして色んな人と関わりたいかった。

気の合う人達が傍にいとこんなにも楽しい物なのかと。ここ最近で今まで生きてきた分以上笑っている気がする程だ。

でもあのまま続けていたらきつと別れられなくなる。なあなあのまま進んだらきつと未来で不幸になる。

だったら悲しくても笑ったまま今に別れた方が、きつといい。

今までで一番楽しくて、そして一番悲しい別れだった。涙が溢れて止まらない。もう皆の声を聞けないと思うと、胸が締め付けられて、掻き篁りたくなるほど苦しくて。

そうして私がいまま話す皆を想像して、余計にその痛みが深くなった。

どれくらいそうしていたか、泣き疲れて気が付いたら眠ってしまったようだ。目をぐしぐしと擦る。今鏡を見たらさぞや酷い事になっているだろうなと思いがら立ち上がる。

今日から何をしようか。過去に跳ばないと決めた今、パソコンを使うことも出来ない。

崩壊した世界を歩いてみるのはどうだろうか。誰もいない、ひび割れた大地か砂の海、そののせいで余計に蒼が映える空だけが広がる世界を、物思いに耽りながら歩くのも。

それも案外悪くない気がした。今までずっと部屋の中で完結させていたから、これからは外の世界に目を向けてもいいだろう。生き残ってる人を探してもいい。

「よっし！ 未来で配信しちゃいますか！」

「無駄ですよ、そんな空元気な言葉は」

「いやああああああ!!!」

不意打ちだった。心からの悲鳴が喉から全力で溢れ出た。それほど異質な光景。ずにゆりと空間が裂け、そこから手が飛び出した。

のっそりと現れたのは剣持先輩その人。良く見れば着ている服はずたずた、片手に持

つ竹刀は鏢の先数センチから上が引きちぎられたようになっていた。

なんだこれは、どういうことなのだ。理解が追いつかない。そもそも、劍持先輩は過去の人物で、私のいる時代の人間ではないのに。

「あーちよつとうるさいですね」

「な、な、ななな」

「いやこれ見ものですね、写真撮って皆に見せたいくらいです」

「ど、どうやって!」

「あれ? 虚空の力舐めてました? いやー僕くらいの才能あると時間を跳躍するくらいちよちよいのちよいですよ」

べ、便利だね。

かろうじて、その台詞だけが吐き出せた。

「さ、行きましようりりちゃん。過去を変えてどうなったか、自分の目で確かめるんです」

「いやいやいや! 色々突っ込みどころが」

「はい逃しません連れてきます、過去人ですから」

「過去人って何さ……」

人の真似をしやがって。

でも、そうやって手を差し伸べる剣持先輩の笑顔は凄くかつこよかった。とても悔しいと思うくらいに。

こんなこと絶対に本人には言ってもやらないと決意をしながら、その手を取る。という
か取られた。

「えっちょよ」

「さ、皆待つてますから」

引つ張られ、一部がノイズがかったような灰色をしている以外は真つ黒な謎の空間へ引きずり込まれる。

先導は剣持先輩。「先導は僕がしますから」という言葉の通りに、数歩先を歩いていく。戻ろうにも、入って来た穴は閉じてしまった。

「どうやったのさ本当に」

逃げられないと悟れば心も落ち着く。

そうすれば浮かんでくるのは疑問。どうやって私のいる時代へ来れたのかということ。
と。

いや、来れた理由は分かる。問題は、荒唐無稽な私の話をどうして信じたか、だ。

「結局あのあとリリちゃんに繋がらないし、パソコンもオンラインにならないし。なので本当のことかなって思って迎えに来たんですよ」

「頭大丈夫ですか劍持先輩……」

「そこはガク君からお墨付きを貰ってますよ」

つまり、大丈夫じゃないということらしい。

「ま、虚空は配信中に時間を飛ばすものつて考えたらなんとかかりましたね、凄いですね虚空つて。ラノベもビックリなご都合主義能力ですよ」

「それを思い込みで実現する劍持先輩も中々の存在だよな？ ふつつーに」

「才能です才能。それにどうですか、これ」

大層大事なものだと言っていた竹刀。無残な姿となったそれを、軽く振る。

「図らずも刀を捨てて虚空を飛ぶための力を取った男になったじゃないですか」

「ぶ、あははははは！」

皮肉な話だ。私を長年苦しめてきた虚空が、最後の最後で私を救うなんて。

それからのことを記すとすると、特筆すべきことがないと言うか。要するにいつも通りのままに収まった。

「そう言えば、虚空の力なんですけどね」

「それ危ない力だから本当に悪用はしないでね剣持先輩」

「僕程の善人がそんなことするわけないじゃないですか。と、いうより出来ませんよ」
「えっ」

「どう頑張つてもあれほどの虚空の力を使えないんです。せいぜい配信時に悪戯するくらいです、もう」

「私の放送で絶対にやらないですよ!?!」

理由は解らないと先輩は言う。私としては過程が大分斜め上だけど、世界を救えたので何の問題もない。

むしろ、日常生活するうえで欠片も必要ないその力が弱まってくれて嬉しく思える。

もう過去を救うこともない。人間じゃなくなった私は夕陽リリという一人の人間に生まれ変わった。

今ではこの時代の住人になり、配信をするかにじさんじの皆と話すか。そんな毎日。これからも、それを続けて行きたいと思う。

あるいは有り得たかもしれない世界線（ギルザレン様と
もいもい）

かつてその吸血鬼は人間に恐れられていた。

当時、敵のいなかった彼は欧州で暴れに暴れ、時の権力者が恐怖のあまり夜に寝付けない程で、各国が討伐隊を結成するも帰って来たのは同数の死にかけた存在。

ハンガリーを縦断し、ワラキア公国に入ったのは1400年。そうして他の国でやったように、全てを蹂躪しようとして——そこで彼の足跡は途絶える。

ワラキア公国で起きた彼による殺戮事件、0。

霧のように消えた彼に当時の人類は首を捻るが、誰も探そうとはしなかった。

それから600年。

「あー、いいですねえ……」

かつて恐怖の象徴であった吸血鬼は、V t u b e rと言われる存在に首ったけだっ

た。

画面の向こうに広がる様々な世界との交流、そして、復讐すべく引きこもっている間
に変わった現実世界。

600年かけて貯めた力を日々V t u b e r 追跡のために使う事に関して、本人もど
うかと考えているがこれはこれで良いと思っていた。

欧州から恐れられた男――

「ふふ、ギルえもんは本当に楽しそうで良いですわね」

「……モイラ殿、か」

ギルザレン三世は上から聞こえた声に表情を険しくする。

人間が立ち入ることのない秘境の奥深くにある自身の居城。自分とシモベ以外の声
が聞こえることはあり得ないのだが、事実として声が飛んできた方へと彼は顔を向け
る。

青空のような色の髪、次に目に入るのは純白の翼と同じ色のドレス、鈴を転がすよう
な声。

人間であれば誰もが魅了される容姿端麗な彼女の名前を、苦々し気に呼ぶ。

「そんな不味い血を飲んだような顔しないで」

「モイラ殿は血を飲んだ事、ないでしょうによくそんなことが言えますねえ」

「比喩ですわよー比喩。ギルえもんはいつも女神を見てネガティブな顔するの、結構悲しいのよ。」

「……ふん」

心にもないことを、と思う。そんな殊勝な感情を自分に向けて抱く存在ではないと彼は知っていた。

「600年ぶりに顔を合わせた私を一目で思い出せなかった自分を恨むように」

「それに関しては女神が謝ったじゃないの」

「吸血鬼は執念深いんですよ」

ギルザレンは手元の画面に目を落とす。こんな女神の相手など、するだけ無駄なのだ。どうせ自分のところに来たのも気まぐれ。誰と誰の組み合わせが如何に素晴らしく尊いものかと語りに来ただけかもしれない。

たまに頷けることはあるが、せっかく力を消費するのならばそれよりは追いたいものを追うのが良い。大体は向こうの方が勝手に喋って気が済んだら勝手に帰る。

しかしてその常は今日に限り、別のようだ。

「そうねえ、出会い頭にいきなり牙を剥かれた時はビックリしたのかわ。ねえ？」

「——この性悪女神が」

「あらあこわいこわい」

「もうその話はいいでしよう」

「ふふ、ちゃんと思いつ出した女神を誉めて欲しいなく。そうね600年前、可愛いペットを虐める存在が確かにいたのだけわ」

「人の話を聞きませんか？」

「ふふ、無理矢理黙らせても良くって？ 出来るなら、だけどね？」

ギリツと歯が鳴る。それを誓ったのが過去のギルザレンだった。

ワラキア公国に入って姿を消した彼。理由は単純明快。目の前にいる青い存在。それに片手で捻られたのが理由であった。

思い出すのも忌々しいと思いを吐き捨てる。しかし、それを読んでいるかのように女神は言葉を綴る。

「ええ、あの時のギルえもんは本当に本当に面白くて、なんで忘れていたのか本当に不思議」

「一生の不覚でしたね当時は」

「でもあれはギルえもんが悪かったのだけわ。大事な大事な私のこいぬ達を無駄に傷付けていたのだから、本当に酷いっ」

「……」

「あんなぼろぼろにしたのにまた女神に齒向かうのも、また面白くて」

「そろそろ黙ろうか？ 私としては別に、ここで女神を騙る悪魔を倒してもいいんですがねえ？」

「出来るならやってみるのだけ、坊や？」

近くに潜んでいたシモベが蜘蛛の子を散らすように逃げ出す。

空気が重苦しいものになり、並の存在ならば強制的に平伏するような、そんな重圧が城内を満たす。

ギルザレンは配信を映していた画面を閉じて女神を睨め付ける。

女神はそんな彼を見下ろし、あざ笑うように坊やと呼んで憚らない。

「……」

「……」

まさに一触即発。十数秒のにらみ合いの後、

「辞めましょう。私の眷属達が悲哀に包まれてしまう」

「ええ、女神も子犬達を悲しませる趣味はないですもの」

お互いにその矛を仕舞う。

二人を抑えたのは誰でもない、二人を慕う有象無象の存在であった。

かつて虐げた存在。矮小なニンゲンという種族が、配信を行う彼にとつて大事な存在に変わるまで時間はそうかからなかった。

配信を急かす声に応えられないことを申し訳なくすら思っている。かつて見下していた人間に、である。

女神にプライド諸共粉碎される前では考えられない。600年という歳月とそれによつてもたらされたカルチャーショックは、ギルザレンの在り方を真逆に変えていたのだ。

「ふふ、ギルえもんの配信楽しみなのだわ」

「別に貴方を楽しませはしません。で？　いつ帰るんですかねえ？」

「……あまり不機嫌にしても配信で何言われるかわからないから、そろそろお暇しようかしら」

「出来れば二度と——もういない……ほんと困った女神だ」

居城と彼の精神に安寧が戻る。

『——化け物が』

『子犬達の住処より長く生きてる女神にとつて、3000年ちよつと生きてるだけで自分を最強と驕り、力のままに動く存在は滑稽に見えるのだわ』

『この恨みは必ず、必ず晴らしてみせます』

『遺言はそれでいいのかしら？　じゃあね、坊や』

瞼を閉じれば、その裏にあの時を鮮明に映し出すことが出来る。当時の全力を以てし

でも届かなかった白の翼。

人間に化け物扱いされてきた彼が、初めて誰かを化け物扱いした日から数百年。

シモベからは良く牙が抜けたと言われるが、それもいいのかもしいのかもしれないと彼は考える。

「さて、次の配信は……」

「あ、聞き忘れたことがあったのよー、ギル子もつと出して欲しいのだから」

「帰れ！」

他人から血を吸う側だった彼。今では他人から時間を吸う様になり、そして他人に時間を吸われるようになった。

血液問題も、開発されたVirtualBloodと呼ばれる飲料で解決したために人間を襲う意味もない。

何より、時間を持て余していた過去と違って今は時間が足りないのだから。

闇色と金色と

漆黒の捕食者は窮地に陥っていた。

いたるところが抉れる地面と灰色の空の中、お気に入りのコートがずたずたになり、普段首に着けているネックレスも千切れて後ろの方へ落ちていく。当然身体も無傷なはずはなく、素肌にも無数の傷が刻まれていた。

まずいな。声の乗らない眩き。裏世界で最近有名になってきた漆黒の捕食者は、正に今、敗北が目前まで迫ってきている。

「なんて力だ」

吐き捨てた台詞が、敵である男の表情を愉悦に染める。男にはほとんど傷らしい傷がついていなかった。金色の髪には欠片の土も付いておらず、上等な白のスーツは戦闘開始前と変わらずどこもほつれていない。

一目見れば誰もがわかる程の差が、そこには描き出されていた。

「くくく、貴様は確かに強いがな、所詮はガキだ」

「くそっ」

「中学生のお小遣い程度では、私の力を超えることは出来ない！」

なんの話かと言えば、敵の能力の話だった。

——『境界内の存在は所持金に応じて身体能力が高くなる』能力。

金が全てと言わんばかりの単純な能力ではあるが、しかしお小遣いが中学生相応のものでしかない漆黒の捕食者にとっては致命的な弱点へと変化した。それに対し、相対する敵はどこだかの財閥のトップ。漆黒の捕食者からすれば縁のない金額を収入として持っており、つまるところとにかくヤベー程男の身体能力は向上しているわけである。

「俺様の弱点を的確に付いてくる、憎らしいが流石と言わざるを得ない」

「ほう……敗北を前にして敵を誉めるとは」

「例えばどんな相手だろうと、存分に力を活かして俺様に膝をつかせたことは素直に賞賛に値する」

「……漆黒の捕食者は真っ直ぐだな。だが、それではこの世界で生き残れない」

「生きてみせるさ、それが俺様の生きざまだからな」

「最初に手を抜き、無用に痛めつけたことを謝罪しよう。もしまた相まみえる時があれば、最初から全力を出す……次があれば、だがな」

もはや打つ手などなかった。満身創痍、能力も相手を視界と手の先に捉えてから発動する必要がある、そのラグの間に敵は人外レベルの動きをして逃げるついでに一撃を加

える始末。

何故十数分も生き残っているのかと言えば、敵が痛めつけるために手加減していたからに他ならない。

しかし、その行為を男は謝罪した。矮小な身でありながら巨大な組織に盾突いた愚か者を見る目から、漆黒の捕食者を『一人の強敵』として認めた男の矜持。叩けば埃しか出ない場所に籍を置く身として譲れない一線。

見上げる漆黒の捕食者に対して、見下ろす男。足を一步引いて拳を振り上げ、トドメの一撃を放たんと構える。

それを正面から見据える目に映るのは、諦めではなく決意。必ず、雪辱を晴らして見るとの決意。

男が理解し、目を細め、

「見事」

動いた。

「――」

静寂。

「誰だ貴様は」

漆黒の捕食者を昏倒せしめんとしたその一撃。実際、そうなるはずだった。

しかしてそれは、招かれざる客の手の中にしつかりと納まっていた。

男が、闖入者に正体を問う。

「卯月家次期当主、卯月コウ」

「卯月家……だと!?!」

「何故ここにいる」

漆黒の捕食者と男の顔が驚愕に染まる。それも当然、卯月家と言えば誰もが知る世界有数の企業。そこに名を連なる者となれば、男にとっては正面から打ち破られる——つまり天敵。

そして漆黒の捕食者にとっては、色々あるがとりあえず友人と表しても間違いではない相手だった。

それでも、思考が廻った男は落ち着きを取り戻す。卯月家の財力は確かに男にとっては抗えないものになるが、現当主ではなく次期当主となれば、話は変わる。

「い、いや、あの卯月家と言えど、現当主でもなければ私には及ばないだろう!」
「やってみるか?」

「上等だ!」

局面は第二ラウンドへ——行くはずだった。

男が地面を蹴る。漆黒の捕食者は、それを目でとらえるのがやつとだった。一瞬の

間、突き出された拳は、卯月コウが一步だけ横に動いただけで避けられた。

それだけで男は解らされた。認めがたい真実。

「ばか、な……」

「父様は俺に力を貸してくれた。ちよつと人助けに行くと言ったら快く、な」

「だからと言ってこれ程の額を、軽々しく……!」

「知らなかったか? Dark^漆ness^黒eat^{捕食者}erには卯月家の後ろ盾がある、覚えておくと良い」

懐から取り出したのは通帳。そこに並べられたゼロの数を見て、男は遂に現実を認め、その先を悟った。

すうと卯月コウが息を吸う。

「一発だ」

通帳を放り投げ、右手で正拳突きを一回。

空気を裂く音と共に、最後の一撃は、静かに重く。

漆黒の捕食者を苦しめた男はの意識は、一瞬で刈り取られたのだ。

「何故きた、いやどうやって知った」

「卯月家の情報収集能力を舐めるなよ、これくらいちよよいのちよいだね」

「借りを作ってしまったのは一生の不覚だ」

得意気に自家の能力の高さを誇る卯月コウとは対照的に、苦々しくぼやく。この借りで何を要求されるかとか、今日の失態を他の仲間バラされるかとかが不安であった。意気揚々と宣言して仲間を置いて単独行動をしたのが今のザマだから、恥ずべき事だと理解していた。

「なに、その情けない顔だけで充分さ」

「こいつ」

「今日の勝情報、猪突猛進して返り討ち」

「やめろ」

「冗談はともかく、これは俺の土俵だった、それだけの話じゃねーか」

「それは、そうだけど」

戦闘など実働面は漆黒の捕食者が行い、それ以外……例えば政治面や資金面は卯月コウが担当する。それを決めたのは他でもない漆黒の捕食者と、卯月コウである。

ただ、今回の件に限って言えば卯月コウの得意分野だったと、それだけの話。それを割り切りれるほど、漆黒の捕食者は大人でないだけだった。

「今日の事は誰にも言わないから安心しろ」

「何？」

どういう風の吹き回しだ、と唸る。卯月コウとの関係は、お互いがお互いの上を取り

合う関係。十重二十重にオブラートを包んで言えば、切磋琢磨し合うもの。今までの流れで言えば、卯月コウは仲間へ今日の事を言いふらし、漆黒の捕食者を恥辱に染めるはず。

しかし目の前の男はそれをしないと宣言した。何か、悪い物でも食べたかと心配してしまう程には常道を外れた台詞。

「それに、勝が一番知られたくないであろう相手にはもう知られているからな」
「あいつも、来ているのか……」

だが、その疑問も氷解した。嗚呼、どうやら卯月コウだけでなく、彼女にも知られてしまったらしい。卯月コウが言った以上、彼女も他の仲間には報告することはないだろう。漆黒の捕食者と卯月コウ、そして彼女の三人は仲間内で一番付き合いが長く、それに比例して連携の巧さも随一であった。

卯月コウが顔を向ける先へ焦点を合わせれば、そこには全身を黒装束に包んだ影が一つ。二人が片手を挙げれば、それに応えるように得物の筒先を天に向けてくれた。

「今度三人でメシな、もちろん勝の奢りな」

「仲間全員で弄れないからってメシの席で晴らそうとするのは勘弁してくれ」

卯月コウが一撃で倒した相手、それだって彼にとつては土俵であったから辛くなかった。負けたことと卯月コウに助けられた事実があつたとしても、それは自分が不甲斐な

かった、力がなかったからだと言える。

しかし、しかしだ。飯の席でそれをネタにされるのは。

「飯が不味くなる……」

「いいじゃないか」

「何が」

「俺ともう一人の飯が上手くなる。トータルで見れば一人分得してる」

「おい」

けらけらと笑う卯月コウ。それに対する自身の胸中は暗い。何が悲しくて三人分のメシの代金を払って不味いご飯を食べねばならぬのか。

漆黒の捕食者も、そんな暗黒の未来を喰らうことは出来なかった。

失言の被食者

「おおお……！　これがパンケーキ……！」

「ほんつと勘弁してくれドーラ」

太陽が一日の仕事を終え、地平線へその身を埋めかけてる時間。路地裏にある閑散とした喫茶店にその姿はあった。

一人は黒のコートをハンガーにかけ、同行者が注文の品に舌鼓を打っている姿へ呆れた目をむけて見守っている。義務教育半ば程の幼さの彼は、本日に限り同行者の財布と化していた。

きつかけは些細な失言。同行者を指して腹ペコだからなとSNSで発言したら、思いつき見つかって遠回しに強請られたのである。

「んむ、そもそも勝があんなこと言うからいけないのじゃ」

もう一人は燃え上がるような真つ赤なワンピースを着た、少年にドーラと呼ばれた女性。身体を巻くように打ち合わせ腰の部分に紐で止められたそれはカシユクールと呼ばれる類のもの。袖は肩先が隠れる程度しかなく、そこから伸びる腕は深紅色にオレンジの線が入ったナニかで覆われ、見える肌は黒で覆われた手の親指部分のみ。

それだけでも正体に疑問符が付くが、最も決定的なのはこめかみから生えているソレと腰の部分から伸びるアレだ。

まずは角。人間にはあり得ない器官がこめかみからおよそ20cm、天を突くように伸びている。真紅のそれは、彼女の腰まで届く髪とお揃いの色。

次に尻尾。尾てい骨の上辺りから真つすぐに伸びるもの。根元は深みのある紅だが、尾の先端は熱を持っていると言わんばかりの輝きを放っていた。

オマケ的な要素で言えば、十人いれば十人が振り返る美貌の持ち主であった。もつとも、彼女の美貌より先に角や尾に目が行くだろうが。

そんな彼女は現在、白い皿に二段積まれたパンケーキを美味しそうに頬張っていた。メープルシロップを適量かかっているので甘さにブーストがかかり、しかし口の中に残らない程度で喉にも引つかからない。

ナイフで切り分けフォークで口へ。実を言うと、二皿目であった。

「三皿目はないからな」

少年——鈴木勝の懽然とした声。中学生である彼には喫茶店にあるパンケーキ二個分の代金は決して少ないダメージ。今月は貯金をしようと思費を抑えていた結果がこれでは彼も報われない。

「まあ、これくらいで許してやろうかの」

「俺様のお金が……」

「なに、子供のお小遣いでファイアドレイクの機嫌が取れるなら安い物じゃろて」

「それはドーラの世界の話だろう。こっちの世界には、竜どころかゴブリンもスライムもないんだからな」

「そうじゃったそうじゃった」

「というか、どうやってこちらの世界へやってきた？ 声をかけられた時は心臓が飛び出るかと思った……」

「あれは傑作じゃったな、動画に収めてみんなに見せたかった」

「いくら画面越しに顔を見ていたとは言え、異世界の存在が際どい姿で出てきたら誰だって驚く！」

何事もなく続く日常、学業に打ち込み自宅へ続く道を歩いて曲がり角を曲がった先、マズい場所だけ隠しましたみたいな恰好の存在がいたら腰を抜かしたって笑われないだろうと思う程には驚いていた。

彼にとつて幸いだったのは人通りが少ない場所だったこと、遭遇地点が家の目の前だったこと、両親が買い物で不在だったこと。慌ててドーラを自宅へ連れ込み、とある金持ちに連絡を取って服だけ手配してもらった。

ファイアドレイクである彼女に合わせたような鮮烈な赤一色のワンピース。お披

露目の時には勝ですら目を奪われた程。

「で、どうやってこちらへ来たか、じゃったな」

「そうだ、そこが気になる」

「別に何も関係はしていないぞ。勝、少なくともお主が考えている存在は無関係じゃ」

「……ならどうやって」

「何、神様から託されただけじゃよ」

いや、それ答えになってないと指摘する前に、一つの指輪がドーラの手から投げられる。

それは指の甲側が膨らんでいる銀色の指輪だった。中心部には円形の大きなオニキスらしき宝石が埋め込まれており、台座の四力所に四角の形で意匠される四つの爪。左右には翼のデザイン。

「こ、これは……」

端的に言つて、かっこよかった。

シルバーとブラックが合わさり最強に見える。

「宝物庫にあつた一品じゃ」

「それは、いいのか……?」

思わず顔をあげる。ドーラが守っている財宝の一部ともなれば、いくら自分の好みド

ストライクで喉から手が出る程欲しくても気が引ける。

「何、ちよつとした加護がある程度じゃ」

「いやそこじゃなくて」

「ぬふふ、この程度は問題ない。その程度のものならごまんと転がっておるからな。ソレ、名前すらないしのう」

「……貰えるなら有難く頂戴するが」

「良い良い、名前もつけてやれ」

名前を授ける事の重大さは勝もよくわかっている。それが例え無機物としても、だ。更に言えば自分がこれから装着するものとなれば、尚更。

都合十数秒。ドーラがパンケーキを食べ終わってフォークの切っ先を空中に向けるようになつてから少し。やつと決めたのか指輪を左手の人差し指にゆっくりと通す。手をかざし、すつと目を細めた。

「ダークネスドレイク、なんてどうだ」

「して、その由来は」

「ファイアードレイクに俺様の闇の力が加わつたということ。闇の炎の力は更に強くしてくれるだろう」

「なるほどのう」

それと、と勝はドーラから顔を背ける。

「俺様の二つ名とドーラの種族から取ったからな、仲間の絆って一面もある」

どうにも気恥ずかしい本音。けれど、わざわざ世界を跨いでまで渡しにきてくれたのだから、それへの誠意として想いの丈を隠すべきではないと思つたのだ。

ちらりとドーラの方を盗み見れば、にんまりと良い笑顔を浮かべていて、跳びかかってくるのではないかと——否、思いつきり抱き寄せられた。

「う、うわああああ！ な、なにして！」

「可愛い奴め！ まったく、こちらへ来た甲斐があつたものよ！」

「人の話をお……！」

何をと言わないが、柔らかい。そこへ顔面からダイブしているのだから思春期の少年にとつては最上の毒である。抱き寄せた本人は勝に対してそんなに気にしないため、どこ吹く風。

どんどんとカウンターを叩いても、それに合わせるように頭を撫でまわされる。正に天国と地獄。

「さて、どうやってこちらへ来たかじやつたな」

「………帰りたい」

「すまほのようなものが他にないか、信頼できる者と呼びこんで漁ってもらつたんじゃ

が、そこに異界へ行き来出来る宝具があつたんじや」

「それはまた、都合が良いな」

「ただし異世界の事を知っていて、その先に知り合いが存在することが条件らしく、常人にはただのガラクタダそうじや」

「本当に都合が良いな!？」

まさにドーラのためだけにあるようなもの。もしくは、過去にドーラの世界にも別世界から流れてきた者がいたのか。「遠い過去に作られたのはわかるが、何年前かわからん」とドーラの言。

とは言え、今の勝にとっては有難い。そうだ、いつそのことタイミングを逃したことも今言ってしまうおうかと口を開く。

「どうした勝?」

口を開けど声を出さない姿にドーラが首を傾げる。

「あ、いやその、都合が良いけど嬉しいとな」

「ふむ?」

「だって、実際に会えるなんて思ってたから。だから、都合が良くても俺様は嬉しいんだ。ドーラ、来てくれてありがとう」

「ほう!」

言葉を受け取ったドーラの顔は喜色で染まっていて、そんな調子だから勝はまた目を逸らしてしまうのだ。そして当然——抱き寄せられるまでが焼き直しの展開であった。

「くううくう！ 勝のドラゴン誑しめ！ まったくまったく、これほどの男はわしの世界にも居らんかった！」

「だああああ！ 知ってた！ こうなるって、知ってた！」

育ち盛りの三人

「「かんぱーい！」「」

明るい店内に三人の声が響く。今日はその三人が予定を合わせて夜ご飯を食べようとなった日。

その中の一人、金髪の少年が二人へ紙の招待状を送るといふ古風な方法で招いた。「高級料理店に」と強気で。もう一人の少年と先に合流し、その後若干遠い場所にいる少女を金髪の少年が呼びつけたリムジンで迎えに行く。それゆえに、レストランに着いた頃にはとつぷりと日もくれた頃だ。ただし、レストランと呼ぶには大変苦しい場所だった。そのお店は、ファミレスの中でも特に安いと評判のチェーン店だったからである。

高級料理店とは真逆の場所。しかし招待された二人は何も不安などない。大事なのは三人で集まることなのだから。——もちろん、高級料理店のネタで弄りはするが。

「なんだかんだ、こうやってゆっくりご飯食べるのは久しぶりじゃない？」

飲み放題のドリンクバーコップをぶつけて鳴らしたあと、喉を潤してから真つ先に少女が口を開く。肩まで伸びる黒い髪は左に細い三つ編みが一本伸びていて、それ以外は伸ばしたままにしている、毛先はやや跳ねている。

そんな少女は学校指定のグレーと白の制服の上に濃紺のカーディガンを羽織り、枕を抱えながらご飯をつついていた。

「そうだなー、俺も忙しくて中々合わせられない」

「……なんか俺様が一番暇みたいだな」

「何言つてんの、もぐもぐ君は実践組なんだから」

次に、二人の少年がそれに同意をする。

一人が金髪の少年。リムジンを持ち出したのでわかる通り、割と名の知れた財閥のお坊ちやま。黄金のような煌めきを持つ短髪の中性的な顔立ちで、それらしく着飾れば女の子に見えなくもないが男だ。

もう一人は変声期を迎えていない少年。黒のコートに黒のロングシャツ、黒いズボンに黒のブーツと黒一色のコーディネートをしている少年。中学二年生と言えば全てが通じるだろう。——実際に力を持ってしまったとの注釈がつくが。

前述の少女を足して三人。ファミリーストランに集まった内訳がこれだった。

「つい最近も一人とやりあったが……あれは助けられてしまったしな」

「同じ年の三人組で動いてるのに、一人で突っ走るもぐもぐ君はいつまでも語り継いでくね」

「卯月家の力をもってすれば歴史書に記すことも出来るが」

「やめろー！」

「遠慮するな、『おなえどし』のよしみじゃないか」

「そうそう、卯月の言う通り」

「……くっ！」

おなえどし、という単語に黒の少年……もぐもぐ君と呼ばれた彼の表情が歪む。もぐもぐ君と言われた彼の名を鈴木勝。『同い年』を『おなえどし』と、二人の前で致命的な言い間違えをして以降それを散々ネタにされていた。挙句の果てに三人組のグループ名にしようとすら言われる始末。端的に言っとうんざりしていた。

その様子をにやにやして見る二人。少年が卯月コウ、少女は出雲霞。それが中学二年生で『同い年』おなえどしな三人の名前だった。

「勝がこんなんだし霞はほわほわしてるし、御曹司の俺がリーダーなのは自然の流れだな」

ところで本日三人が集まった理由は久しぶりに三人でゆっくりしたかったこともあるが、三人の仲で誰が一番偉いかを語り合うためでもあった。

先手はコウ。勝の言い間違えを利用した形での先制攻撃。

「コウの下になるのだけは嫌だ！」

真っ先に反応したのは利用された勝。霞はどこ吹く風でイカスミパスタを頬張って

幸せそうに頬を緩ませていた。

対局的な二人の反応。その理由は単純で、この言い争いが起きるのはこれが初めてではなく、定期的にコウが言いだしてその度に勝が反応する。三回目辺りから霞はスルーすることを覚えた。

「でもこうやって今日は俺様の招待状で集まったわけだろ？」

「あのミミズが這ったような不細工な星マークがついてる紙のだな」

「は？ 全身黒でキメてるくせに目は白くなっちゃったのか？ ミミズが這ったは言いすぎだー」

「汚いのは認めるのか」

「前衛的って言葉を知らないらしいな？」

「知ってますうううう！ 前衛的って前に行ってる様だろ！ それくらいわかる！」

「はっ！ 語るに落ちるとは正にそのこと！」

「二人ともうるさい！ ご飯くらい静かに食べれないの!？」

……この言い争い、終始こんなものである。二人がヒートアップして、周囲を考えた霞が叱りつける。しかし少し経てばまた二人の声が大きくなり、霞が喧嘩両成敗と言わんばかりに止める。霞が三度目はないと警告しているからか、二度怒られれば二人はその日はもう争わない。

楽しさの過剰摂取はともかく、霞に怒りの過剰摂取をさせるのは仲間としても友人としても、本意ではないのが二人の共通の思考であった。

「でももう一ヶ月か」

「そうね、本当にあつという間だったけれど」

「俺様もこれ程濃い一ヶ月は初めて経験した……」

実はこの三人、出会ってまだ一ヶ月しか経っていないのである。しみじみと呟く面々。同じ学年であれどそれまで全く面識のなかった三人が、ここまで急速に仲を深めたのは特殊な環境に身を置いているのが大きい。

そんな世界に身を置き、慣れようと必死に過ごせば毎日があつという間に終わるのも当然で、こうして改めて確認してやつと実感として月日の経過を感じられる。

「最近大きなことと言ったら勝が負けかけたのと、ドーラ様がこつち来た事だろ」

「ちよつと待って、ドーラ様がこつち来たって私聞いてないんだけど」

「おい勝」

信じられないものを見るかのような目が向けられる。それに対して、勝の表情は完全にやらかした人のソレだった。

「……ご、ごめんちよつと俺様も慌ててて言うの忘れたんだ」

「ねえ」

「ごーめーんって！」

「いきなり勝から女物の服を何か用意しろって言われてついに目覚めたのかと思つたぞ」

霞が勝に詰め寄る。ドーラと呼ばれるのは女性で、彼らの所属するチームの一員であり、異世界に存在する現実には会えない仲間、であつた。過去形であるのは彼女がこちら側への通行手段を偶然手に入れたためにいつでも会えるようになったからだ。

それを二人が知っていて、自分だけ知らなかつたのが霞は詰まらない。もつと早く教えてというか、さっさと連絡してその日に会わせてくれと言いたかつた。

「そんな大事な事言つてくれないとか泣くよ私？」

「待つて！ ごめんほんとごめん」

「勝う！ お前ほんと女泣かせるなんて酷いな！」

「卯月も私には連絡くれなかつたよね」

「いやちよ」

蚊帳の外からこれ幸いと友人を攻撃したコウだが、残念ながら当日会つてゐる以上飛び火は避けられない。

「いや俺は服渡しただけで当日めっちゃ忙しくてそれ以上居れなかつたんだよ！」

「でも連絡くらい、できたでしょ？」

「いやだつて勝がしてるもんかと」

「会った後も連絡なかったけど」

「いやそれは忙しくて」

「……」

「……」

「……………」

「きよ、今日は俺の奢りだ！」

卯月コウ、轟沈。ちなみに鈴木勝はとつくに出雲霞へ屈している。ただし対価は「なんでも一回言う事を聞く」とありきたりな約束だ。何か買うかお出かけに誘おうとしても、持ち合わせがほとんどない。

むすつとしてゐる霞も奢りと聞けば多少は気が晴れる。パスタ以外にもう一品と、オマケでデザートも、だ。

「コウがこう言ってるし、勝も御馳走になつたら？」

「えっいやそれは」

「いやどうせ奢るなら勝のもいいだろう、御曹司だから……！」

「無理しなくても」

「いやマジでこれくらいなら問題ないからな」

こうして勝も奢られることになった。金銭的に余裕のない彼にとっては大変有難く、相手がコウなので遠慮なく注文を追加するのだった。

ちなみに三人合わせて4200円分。いくら育ち盛りと言えよく食べるな、とコウが震えるまであと十数分。

会計も終わって帰り道。ふと勝が立ち止まる。数歩先、あるべき姿がなくなつたことに気付いて止まつたのが二人。

「どうした？」

「まあ待て、少し聞け」

「何だよ」

「おなえどしと言うのは、言い間違いじゃない！」

何を言い出すかと思えば、『おなえどし』に関する事だつた。実はこの日に備えて勝はずつと考えていた。考えて考えて、身近な人を頼り辞書を引き、そうして答えを見つけた。これならば納得させられるのではないかと自信すらある。

しかし、右手を顔にかざしてしたり顔で宣言する勝を見る二人の目は冷たい。今更何

を取り繕ってんだとその目は言外に語っていた。

だがこれは彼にとつて予想していたこと。ちよつと怯みはせども止まることはない。

「俺様達が所属してるチームはSEEDsだろ？」

「確認する事でもないな」

「SEEDsは種、俺達はこれから花に至る未来の途上、やつと芽吹いた苗なんだ。ほぼ同時に芽吹いた苗。だから『おなえどし』なのさ」

決まった。そう思ったのは勝だけである。

「へーそう」

「本気だぞ俺様は！」

「おーすごいな勝、よく考えたんだな」

「だーかーらー！」

相変わらず変わらない目に平坦な声。抗議の声をあげるも霞の反応は変わらず、コウはさっさと歩きだす始末。

しかしこれ以上の問答は時間が許してくれない。現在時刻、22時を過ぎて少し。

「ま、いいんじゃないか！ 霞、勝、帰っぞー！」

コウの声に二人も慌てて歩みを早める。どんな世界に身を置こうと彼らは中学生、どんな敵よりも今は警察に補導される方が怖かった。

Stoop to conquer

こういう時期だからこそだろう。人々は涼しさを求め、体感的な涼しさに飽いた人間達は精神的な涼しさを求める。一人では立ち向かえなくとも友人の力を借りれば、もしかしたら乗り切れるかもしれないと考えて手を伸ばす。

——例えばホラーゲームとはそういうもののだが、その手を伸ばした先が同じくホラーが苦手な相手であつた場合はどうなるか？

「ぎゃああああ!!」

「うおおああああ!!!」

悲鳴が悲鳴を呼ぶ。

「ヒイツー!」

「え!? なんじゃなんじゃ何が見えたんじや!」

気付かなくても良かったことを、片方が気付いてしまつて余計に恐怖を生んでしまう。もちろん、見つけた方はあまり語りたがらないから相方はわからない不気味な感覚だけが残る。

最初はあつた二人の間が、ゲームを終える頃には肩が触れ合うか触れ合わないかぐら

いまで縮まっていた。顔を見合わず二人、そこに甘酸っぱいものなど欠片もなく、あるのは恐怖の名残のみ。

ファイアードレイクである彼女——ドローラが、こちらの世界へ気軽に来れるようになって、そう日も経たない内に、鈴木家では彼女の存在が快く受け入れられるようになっていた。

初日だけならともかく、SEEDsの仲間達との顔合わせや直に現代に触れるために、ほいほいと来れば、現代通貨を持たない彼女に降りかかるのは宿の問題。その都度戻るのは合流のために連絡を取るのもめんどうになる。

毎度毎度親に隠して部屋に隠すのは容易ではないし不誠実だ、とのドローラの言を聞けば鈴木家長男にして義務教育途上の彼——鈴木勝もその通りだと思わざるを得ない。

「ええ、ちよつとこの美人は誰!？」

「と、友達……角とか尻尾は、コスプレで……」

「う、うむ……勝とは良き関係を結ばせて頂いている」

「良き、関係……？　ちよつと、どこで引つ掛けて」
「そ、そんなんじゃねーよ!!」

話を通した結果が、これだった。文字通り世界が違ふ美貌の持ち主のドーラを、まだ教えることが一杯あると考えていた息子が連れてきたともなれば、知らない内に大人になつていた感慨深さを感じてしまうのも無理はない。

つまるところ、とんとん拍子で話が進んだ。もちろん、勝のいないところで両親からキツチリ釘を刺されたことは、ドーラの中では秘密である。己の正体もその時にきちんと話していた。

「なんとというか、勝の両親は凄いの……誰とも知らない、年の離れた存在が家に來ることを許すとは」

「自慢の家族だからな！」

ふんす、と胸を張る勝。この時期の子供にある反抗期とは無縁の両親自慢に、知らずドーラの口が緩む。夕飯を御馳走になつてほくほく気分だったのもある。友人とその家族、卓を囲んで世間話を咲かせながら食べるご飯のなんと美味しいことか。本当に、人間の姿になれて良かったとまで思つたほどだ。

夕食も終わり今日はもうやることなく、二人は勝の部屋で色々なことを話してい

た。SEEDsの皆のこと、二つの世界の諸々、これからどんなゲームをやるか、学校での生活……そうして沢山のことをお喋りして、どちらからでもなく「ホラゲをしよう」という話になった。

これから先避けては通れぬ道、通話でやるよりは横に誰かいる方が心細くないだろうという気持ちがあつた。だから二人はノリノリで、PCからインストールしていたゲームを起動した……してしまつたのだ。

「……………」

「……………」

冒頭に戻る。二人とも無言。流石に良い時間だったので一旦終わつただけでゲームの完走自体はしていない。ただそれでも大分進めたため、幾度とないギミツクに冷たい汗をかかハメになつた。

音や曲がり角の先で目が合う事数回、そうして警戒心を最大限に高め、BGMも相まって絶対出るだろうと覚悟を決めた道の先には何もなく、一息ついてドアを開けた。瞬間、画面の下から唐突に現れる血まみれの手。とても他人に訊かせられない可愛らしい叫びのデュエットが、部屋に響いた。

とにもかくにも二人の精神状態は最悪のソレに近い。時間も時間、幸いなのは丑三つ時と言われる心霊系によくある時間になっていない事か。

「誰じゃホラゲやろうなんて言い出したのは」

「ドーラだろうが……」

「いや勝じゃ。よしんばわしが言い出したとしても、こんな怖いゲームを入れた勝が悪い」

「ホラゲ無理なら言えよお！ ドーラの悲鳴でこつちまで怖くなったんだ！」

「まるで自分だけなら怖くないみたいない草じゃな？」

「そーうーでーす！」

「ロツカー開けた先に血まみれの死体があつた時の声は皆に聴かせたかつた程じゃがのう？」

「その返し、前に聞いたことがある気がするぞ……」

正に不毛な争い、声量こそ抑えているが解決することのない責任の押し付け合い。二段ベッドの柵によりかかりながら反論する勝に対し、黒いパーカーに同じ色のスウェットパンツを着用したドーラが負けじと言葉を飛ばす。彼女の腕が動きたびに、パーカーに描かれたデフォルメされた赤い竜が歪む。

勝の方と言えば、普段使いである半袖半ズボンの薄いパジャマのお供に、愛用の枕

を抱えていた。ゲームを終えてなお続くうすら寒さに、もつと厚いものを着れば良かったと後悔していた。

こんな低レベルな言い争いをしているのも、沈黙が怖いからに他ならない。ホラゲをプレイした後特有の無音への恐怖。焦りを駆り立てるBGMが鳴るか彷徨う亡者の悲鳴が耳に飛び込むか。そんなありもしない妄想をしまつて余計に怖くなる。そうでもなくとも静まり返った室内に物音がすれば肩が跳ねる。

「そもそもドーラの世界は幽霊とか居そうだけど何で怖がるんだよ……」

「幽霊はな、焼けないんじや」

「そこなのか」

「今日の場合は焼けない事もない、そうなると幽霊は勝のばそこんと共にこの世から消え去るじやろうがな」

「俺様が間違っていたよ」

とは言え、勝にも言わんとすることはよくわかった。攻撃が通る相手ならば、最悪の場合自分の手でなんとかしてしまえばいい。塩が利くならご飯にかけるように振りかけてやればよし、十字架が利くのなら神にだつて祈つてみせる。

「そういう勝こそ、特異な能力を持つておろう？ かような存在等見慣れておるかと思つたんじやが」

「慣れているからこそ、だ」

意外そうなドーラの表情に対し、勝の顔は険しい。なるほど確かに闇の世界にはそのような存在や、霊や死体を使役する能力を持つている者もいる。それらに対峙したことだって片手で数えられる程度だがある。

なればこそ、その恐ろしさを知っていて楽観視など出来るわけがない。

「いやこれゲームじゃが……」

「その通りだ。まだ敵対者なら俺様のスイッチも入ろうが、これはゲーム。純粹に驚かす為だけに存在するからタチが悪い」

実際に危害を加えないから、心の底から警戒が出来ない。勝がホラーゲームに対してあまり強くない理由がソレ。

現実とゲームは違うのだと一番教えてくれるのがホラーゲームだった。

「ところでドーラ、寝床は客間だったはずだが」

「何、勝が一人では寝れなくなるのではと思つてのう」

「俺様が？ そ、そんなわけねーだろ！」

「声が震えておるぞ」

痛いところを突かれた。いや決して怖くて寝れないなどと言うことはないが、それでも真つ暗闇の中の静寂にうすら寒さを感じてしまうのはホラーゲームをやったあとに

は仕方ないこと。それに、と勝はドーラをよく観察する。

手の半ばまで伸びる袖を握りしめ、注意深く見れば尾の先が丸くなっている。きよろきよろと世話しなく目が動いていてまるで何かに怯えているよう。

「ドーラも、人の事は言えないみたいだけど」

「っ！」

「一人で寝れないならば、ここで寝てもいいが？」

数十秒前と逆転する立場、更に言えば、鈴木家の客間は勝の部屋を出て薄暗い廊下を歩いて目指さねばならない。果たして今のドーラにそれが出来るかどうか？

勝はそれができないだろうことを確信していた。ちなみに自分はどうかと聞かれれば、固く口を閉ざすであろう。

「……………」

「ん？」

「寝る！ わしも！ ここで！ 寝る!!」

「お、おい！ そこ俺様の場所！」

ファイアードレイク、ここに陥落。開き直ったドーラは立ち上がると、勝を押しつけてベッドに寝転ぶ。30倍近く年上である彼女だが、その威厳とは全く無縁の姿。

ドーラが寝返りをうち、全体が軋む。本来の持ち主である勝はほとほと困り果てた。

いやこれはどうすれば良いのか、え、まさかこれ一緒の部屋で寝るのかいやそんな馬鹿な。

無意識に顔を覆う。しかしながら時間も時間、未だ幼き身に抗いがたい誘惑が急速にせりあがって来ていた。そう、その名は睡魔。漆黒の捕食者を称する彼にも魔の手は例外なく伸びてくる。

「いいや……俺様ももう寝る……」

普段の彼ならば戸惑い、気恥ずかしさから絶対に選ばない選択肢。しかし服を着ていること、眠気がとても大きな主張をしていること、ホラーゲームをやった後であること。様々な要因が重なった結果、数秒で思考が答えを導き出したのだ。

二段ベッドの上側が空いてはいるが、こうまで眠いと梯子を登るのすら億劫になる。ドーラを手で端へと追いやり、自身も下段へと身を埋める。お互い端に居ればいいだろうという楽観。

「お、おい勝」

「くああ……」

これに慌てたのがドーラである。確かに用意された客間ではなくここで寝る気満々だったのは否定しない。百歩譲って客間までの道のりは我慢できるとしよう、しかし、無音の深夜に一人で寝るのは嫌だ。何かよからぬ夢を見るような気がして。なので二

段ベッドの上下どちらかを借りようと思ったのだが内心を言い当てられてしまつて開き直つた結果がこれだ。

別に人間の子供相手に思うところがあるわけではなく、これ起きた時とか勝の両親に見られた時どうすりゃいいんじゃないかとそちら方面の心配がある。

「ええんか？ 勝、お主それで……」

「……………」

「もう寝ておる……」

規則正しい寝息。もうこうなればなるようになれだ。心配しなくとも勝が起きる前か両親が来る前、それまでに自分が起きて二段ベッドの上か客間まで移動してしまえばいい。

決めてしまえば余裕も多少は生まれる。恐怖の余韻を誤魔化す意味合いも兼ねてそつと頭を撫でる。起きている時は抵抗してくるが、寝ている今はされるがまま。フアイアードレイクの持つ温かさとは違った種類の温かさが、手の平から伝わってくる。

安らかな寝顔だった。何か良い夢でも見ているのか、口がにへらと現在進行形で緩んでいる。そんな顔を見ているからだろうか、眠れないと思つていたはずなのに意識が微睡んできた。

「おやすみ」

きつと、良い夢が見れそうだ。夢の世界へ旅立つ直前、そんなことを思った。

翌朝、起きる前に抜け出せばいいとのドーラの目論見は崩れ去ることとなる。精神的に疲労していたドーラは、自分が思っていたより深く眠ってしまったのだ。そしてそれは勝も例外ではなく。

朝食の場にて愉快そうに肩を震わせる勝の母親が、二人の寝顔を一枚に収めた写真を見せることで場は大いに荒れることとなる。——仲の良い姉と弟みたいね、とは母親の談。

Weather is unknown

多くいる盟友達との模擬訓練。事前に社築と動作確認をした時には問題なく動いていたソレが、今に限って動かない。

悔しい、その気持ちで胸がいっぱいだつた。隣で社が落胆したように首を振るのが見える。時間も遅くなり、どうにもならないというのが社の見解。

時計を見やれば、二つの針が示す時間は午前二時を半ばまで過ぎた頃合い。作業を何時間も続けて疲労の蓄積も著しい。

「でも俺様は……！」

画面の向こう側に数多い友との約束を破りたくない。その一心で手を動かし、頭をフル回転させてなんとかしようと思つて。

なおも原因を探り復旧のためにと手を動かす勝の腕を、社の力強い手がガツシリと掴んだ。

抗議の目を向けた先にあつたのは、深い深い闇の目。その呑み込まれそうな程混沌とした目に、言葉が喉から出なかつた。

「やめよう、今日は」

「で、でも」

「一旦寝たほうが良い。起きてからだって充分時間はありますから」

「皆が、待ってるんだ……」

「無理して明日の本番に響いたらいけないから」

大人の社に腕を掴まれてはびくともしない。最早続けるのは不可能だった。理由もわからないままだからあれほど楽しみにしていた盟友に対する負い目ばかりが重なっていく。

何がいけなかったのか、それを目の前の画面は何も教えてくれない。ただ、チャットだけが延々と慰めの言葉を下から上へと、運んでいた。

「機関の差し金かな、社さん……」

「さあ、私にはわかりませんよ」

力ない声に返す社さんの声は酷くぶつきらぼうだ。怒っているのかと思えばそうでもない、顔を伺えばやけに疲れたような顔をしている。

そこで今日は社が仕事だったことを思い出す。その後からこうして手伝ってくれたのだから、頭が上がらない。勝にとつて、社築という大人は尊敬出来る大人だった。

とにかく今日はおしまいだと言うならば、早く社を休ませることにする。彼がどれほど働いているかは、チームの会議にも中々顔を出せない事で察することが出来た。

「つと、そうだった！ 社さん！ 今日ありがとうございます！ 俺様ももう寝るから」

「私で良ければいつでも頼ってください、勝くんは私にとってはまだ子供ですからね」

「もう！ 子供扱いしないでくれよ！」

「そう思うなら早く寝る事です。寝る子は育つって言うじゃないですか」

「ぐぬぬ……」

軽い言葉のやりとりで沈んでいた心がちよつと浮いたのが勝自身にもわかる。

—— 明日こそはかならず。部屋から出ていく社の後ろ姿を見ながら、決意を固める勝の姿がそこにあつた。

危なかつた。社築が外に出て、冷たい風を浴びながら先ほどまでの時間を振り返る。特に最後の数分は気が気でなかつたのだ。ずっと堪えていたものが決壊して溢れ出てきてしまいそうになって。

そうなつてしまえばもうSEEDsにはいられない。残るのは正気を失い、狂つてしまった大人が一つだけ。仲間に迷惑をかけるなど、社築は許容できなかつた。

真つ暗な夜空にぼつぼつと見える星は綺麗で、夏に入ったばかりで温い風が肌を嘗め

ている。どちらかと言えば暑いのに、浮かんでいる汗は身の毛もよだつ怪奇現象によつてもたらされたものだ。

—あなた、いつ帰ってくるの。

—おとーさん！ あそぼー！

—次の休日は家族で遊園地にでもいきませんか。

—わーい！ ねーねーおとーさんも休み取れるよね！

—そうよ、働き過ぎはよくないもの。

「やめろっ！ 私には妻も娘も……いないんだ！」

片手で頭を抱え、もう片手で虚空を振り払う。

妻や娘を自称する声の幻聴が聞こえるのはこれが初めてではない。普通の会社員として働きたして数年後、ちよつとしたことで社会の闇を知り、それと戦いだしてからしばらく経ったある日に聞こえ始めたものだった。

目を強く瞑っているのは、開けたままだとぼんやりと輪郭が見えるからだ。存在しないはずの人間が、薄らと。そのまま見ていると本当にその場に現れそうな確信があつて、ずっと目を瞑つて見ないようにしている。

これが何なのか、社もわからない。けれども、この現象は今まで止まることなく、不定期な周期で脳内に直接語りかけてくる。これを誰かに相談したこともない。約一名、

気付いているような節はあるが何も言つてこないから好意に甘えることにした。

大人の小さい意地と言われればそれまで。けれども子供も多数抱えるチームに置いて、信じて頼れる大人でありたかった。

——そんな無理してはだめよ。

——父さんだつて疲れてるのに、なんで休まないのさ

次に聞こえてきたのはさつきとはまた別の声。

恐ろしい事に、この幻聴は聞こえる度に人物が変わる。声も口調も、薄らと見える輪郭も。挙句の果てに年齢だつて定まらない。社のことを、しわがれた声が父と呼び、舌足らずの幼い声が嫁を自称した時は本気で気が狂いそうだった。

いや、近い将来狂つてしまうのだろうと思う。社会の闇と戦つていく内に、自身もその闇に染まっていくことに社は気付いていた。倒す敵倒す敵が安堵したかのような表情で消えていくのが最初はわからなかったが、今はわかる。

「アレは、なれの果てだ。社会の闇と戦つた私達の……」

嫌だと叫びたい。声高に、人目も憚らず助けてと手を伸ばしたい。それをしないのは簡単な理由。

自分と同じくらい大切な存在が、出来てしまったから。

だからギリギリまでは頼られて導く存在になろうと思う。最後は一人でひっそりと。

仲間が悲しむのは考えずともわかるけれど、そこは大人の我儘ということでは我慢してもらおうと。

その時が何時になるかは、まだわからない。

自己と自己

その日、彼はセカンドチャンネルで配信をしていた。久方ぶりのタイピング対決、負けければ盟友の提案したえげつない台詞読み上げが待っているから、手を抜かず本気の勝負だ。

部屋に響くのは打鍵音。途切れることなく続くそれは、途切れることなく続く問題のせいだ。一度始めれば十数問の打鍵を終わるまで休ませてくれない。

「いよっし！ 今回は俺の勝ちだ！」

『つよつよタイピング』

『さす勝』

『参加した盟友達もお疲れさまー』

ふう、と息を吐けばその間にコメント欄が流れていく。彼を誉めるコメントもあれば、参加者をねぎらう言葉、次は自分が参加して負かせてやると息巻く者。

多彩なコメントを楽しみながら、次の参加者を募集する。ぽんぽんとプレイヤー名が表示され、そこで目が止まった。

「ん？ これは……」

己と同じ黒色指定、漢字で三文字の名前。彼にとっては13年にプラスして5年付き合ってきた半身のような文字列。

——鈴木勝

真正正銘、彼の名前がそこに表示されていた。リスナーも遅れて気付き、コメントが加速する。

『草』

『ええんかこれ』

『偽物じゃんやっちゃえやっちゃえ』

「ふん、我が名を騙るとは、解らせてやる必要があるな?」

相手もそれ相応の実力を秘めているということは予測が付く。本人の名前を使って放送内でゲームに参加する事実で証明される自信の表れ。

これで負けた日にはもう二度とゲームに参加など出来ない。

ふと、コメントではなくゲーム内のチャット欄が動く。

<面白そうだから俺はこのゲームを抜けるぜ!>

<鈴木勝同士の対決が、見てえ……!>

「え、ちよ?!」

絶対面白がついているだろうという台詞と共にチャットを打った人物が退室する。

それから遅れて更に二人。

<草。だがそれに俺もノるぜ>

<乗るしかない、このビッグウェーブに>

残った一人は大分葛藤があつたのだらう、やや遅れて。

<これが終わって次の試合は優先的に入れるようにしてくださいね……?>

これにて、鈴木勝の名を使ったプレイヤーと本物の鈴木勝だけ。

そんな状態であるためプレイヤー名が表示される右側はとても寂しいものだが、どこか最終決戦じみたものがある。

同じVの者ぐらいでしかありえない一対一の対決が、どこの人間とも知らぬ存在と成立しようとは思わなかつた。

画面のコメントもほとんどは彼を応援するものだが、一部の面白がりは偽物の方に声援を送っている。彼が負ければ事前に募集した台詞リクエストで人気の高いものを読まなければいけないからである。

裏切者どもめ、とは言わない。盟友あいつらはそんなものだからだ。

<ありがとう>

件の偽物から、そんなチャットが送られてきた。ノリノリで出て行つた他のプレイヤーに対する感謝だった。それと同時に、名前の横に待機中が表示される。

「さつき抜けた人はこの次に絶対入れるから、安心してくれよな！」

カウントが始まる。3, 2, 1, start!

ここからもうコメントを読む暇がなくなる。いかんせんタイピングに集中しなければならぬ。部屋には打鍵音と、たまにタイピングミスをしてしまう時の呻き声。だから気付かなかつた。コメント欄が少しおかしなことになっていたのは。

最初に気付いたのは誰だっただろうか。

『なんだ、これ』

『おいおいマジか』

画面上にはタイプに反応して消えていくローマ字群。それ自体はこのゲームの至つて普通の光景なのだから特筆すべきことではない。

問題はプレイヤー名『鈴木勝』のタイピング速度にあった。

一つのミスもなく完璧なタイピング、本物がミスをすれば、まるで気遣うように速度を落として一文字だけ残して復帰を待つ。そうでなければ彼よりも必ず早く打ち終える。

『どうなってんだこれ』

『多分ここまで全部偽物が先に終わってる』

まるでロボットのような正確さ。であれば当然疑われるのはアレだ。

『お？お？チートか？？』

ルールの埒外にある、つまり反則技。コメントが若干荒れかけるも、大多数のリスナーはそれに対して若干懐疑的であった。

たかだかタイピングゲームでこんな解りやすいものを使うかどうか。有名ゲームならともかくこんなドがつくマイナーゲームで態々作ってまでやるのか。

次にゲームに参加している件。チートを使うならばもっと判別が付かず紛れてやるもので、参加型に自分から入ってきて、という矛盾には疑問符が付く。

そして最後――

『でもそんなズルする奴がわざわざありがとうなんてお礼言うか？』

『……ま、まあうん』

『一理ある』

試合前に見せた一欠片の感情。なんとなく悪い奴じやあないんじやね？ という曖昧なもの。

鈴木推しの名前勝の名前というのもほんのちよつぴりあるが。

ともあれ、コメントが盛り上がっている間にタイピング対決は終わりを迎える。どち

らが勝ったかは言うまでもないだろう。

「うそ、だろ……?」

その結果を見て彼は啞然とする。

自分より僅かに高い k p m はタイプスピードが自分より優れている事を示していた。

その右にある正確性を表す数値は三桁、つまり100%の表示で、下に表示されるグラフも全てが綺麗に上回っていた。

文字通りの完敗である。

コメント欄を遡ってみれば、リスナーもざわついていた形跡が残っていた。驚愕や愉快、卑怯な手を使ったと断定して憤怒や悲哀等々。

ただこの戦いで感じ取った奇妙な何かが、奇しくも大多数と同じ答えを彼に抱かせていた。即ち、チート等使っていない、純粋な実力によってもたらされた敗北だと。

『対戦者だけど、鈴木勝も大したことなかったな』

流れるコメントを見ながら、悔しいと返していた中でそれは一際目立つコメントだ。

再びざわつくコメント欄。そのコメント主の名前を見た、本人が一番驚いている。

『大したことないな13歳?』

「お前、誰だよ！」

『名前欄も見えないのか？』

「そう、じゃない……！　だつて！」

それは、俺のアカウントだろうが。叫びかけて、なんとか声を飲みこんだ

D・E・放送局【鈴木勝／にじさんじ】。それは、彼のファーストチャンネルの名前。

成りすましを疑ったのは全員一緒。そして名前からチャンネルへ飛んだ全員が、本物だと確認してコメントに流した。

リスナーの脳裏に自演の二文字が過ぎる。

「これは自演でも劇場型でもないんだ。俺自身も、何が起きてるか……」

『あつと、そうそう乗っ取りも違うから安心してくれよ？』

「はっ！」

『いや乗っ取りは、むしろ13歳の方が先と言った方が正しいか』

ふと、突拍子もない仮定が彼の思考に浮かんできた。

鈴木勝の名前を使ったこと、13歳という呼び方、そしてこの言いぐさ。

けれどそれはあり得ないことなのだ。『あの人』は彼を知らないはずなのだから。

だから、今度は抑えきれずに否定するような声色が漏れてしまった。

「ま、さか……」

『よう、13歳の俺。5年後から本物が《解らせ》に来てやったぜ』

もはや考える必要もなかった。

画面の向こうでファーストチャンネルを操っているのは——現実世界で目覚めた
鈴木勝^{自分}だ。

ひゅつと、喉が鳴った気がした。

『俺はお前を認めない、なんて言うつもりはないが』

やめろ。

視界が暗く染まっていくような感覚。

『少しくらいは仕返ししたっていいよな?』

ぶっん。

ライブ ストリームはオフラインです。

「ま、待て! まだ終わって!」

『これからお前のゲーム配信には参加させてもらうが、俺が勝つたらその時点で配信はお開きだ。もちろん定期的にやってくれないと、どうなるかなんてわかるな?』

突然の終了に加速するコメント欄だが、その中であつてなお目に留まる存在感。

ボタンを押せばすぐに再開できるはずなのに何故かやる気が出てこない。

これが敗北なのだ。完膚無きまでにねじ伏せられた、敗者の気分。

なんという無力感、なんという忸怩感。これ程までに感じてしまうのは、相手が五年後の自分だからだろうか。

負の感情がごちゃ混ぜになったまま、彼はベッドの上に身を投げた。

後に自演戦争^{Funny War}などとリスナーから言われるようになる鈴木勝^{13歳}と鈴木勝^{18歳}のゲームを通じたぶつかり合い。

自演と揶揄されているが「Funny」と綴られる辺りリスナーがこの状況をどれだけ楽しんでいたのか見えてくる。

週に一回か二回繰り返し広げられる光景の理由は割としようもなかったりするのだが、それを彼らが知るのもう少し後になる。